

堀江典生編著

『現代中央アジア・ロシア移民論』

ミネルヴァ書房 2010年 xix+436 ページ

おか なつこ
岡 奈津子

中央アジアとロシアのあいだでは、ロシア帝国の時代から大規模な人の移動が繰り返されてきた。ロシアによる中央アジアの支配が確立した19世紀後半以降、ソビエト連邦成立を経て1960年代までは、移民の流れは主にロシアから中央アジアへ向かっていた。しかし1970年代以降はそれが逆転し、91年のソ連崩壊後は中央アジアからロシアへの移住がより顕著になった。ロシア系の人々を中心とするこの移住の波は今世紀に入ると落ち着きを見せたが、中央アジア諸国にとってロシアへの出稼ぎは近年、その重要性をさらに増しつつある。ただし最近では、中央アジアでもっとも経済的に発展したカザフスタンが移民の受け入れ国に転じ、周辺諸国から定住・労働目的の移民を引き寄せるようになってきている。

ソ連崩壊後の旧ソ連における移民問題、特にロシアへの移住については、英語およびロシア語によるものを中心に豊富な先行研究の蓄積がある。ただし（ロシアへの移民の送り出し国としてだけではない）中央アジアに焦点をあてた研究は比較的少ない。本書は、中央アジアの移民問題を多面的に扱った日本語文献として貴重である。

本書は4部構成となっており、第I部「中央アジア・ロシア移民問題の領域」では、中央アジア諸国の人口・社会状況に関する統計的分析、この地域の移民問題への国際労働機関（ILO）の取り組みなどが紹介されている。続く第II部「中央アジアからロシアへの移民」および第III部「中央アジアからカザフスタンへの移民」は、それぞれロシア、カザフスタンへの労働移民および民族的背景を理由とした移民が対象である。第IV部「市民・移民・地域の安全保障」は、移民問題と地域の安定、国籍制度、移民に対するステレオタイプや排外主義、人身売買などのテーマを扱っている。また「付録」として、モス

クワ在住の中央アジア出身の移民へのインタビューが、インフォーマントの写真つきで掲載されているのも興味深い。

全部で16章からなる本書の執筆陣は、編者を含む3名の日本人と韓国の研究者1名以外は、現地（ロシアおよびカザフスタン）の専門家から構成されている。またその顔ぶれも、人身売買撲滅に取り組むNGOの代表や国際機関職員、政府の政策決定に深く関与している研究者など、実に多彩である。

タイトルに「中央アジア」とあるものの、中央アジア諸国のなかではカザフスタンにより重点が置かれている。これは本書でも論じられているとおり、同国が大量の移民を送り出し、かつ受け入れているだけでなく、移民の経由地としても重要な役割を果たしていることに鑑みれば妥当であるといえよう。

なお中央アジア諸国出身の移民にとって、ロシアは確かに最大の受け入れ国ではあるが、旧ソ連以外の国々への移住が取り上げられていないのはやや残念である^(註1)。ちなみに第III部は「中央アジアからカザフスタンへの移民」となっているが、ここで取り上げられているカザフ人移民の出身国は、近年、ウズベキスタンの比重が増してはいるものの、モンゴルや中国も含まれている。構成について付言すれば、中央アジアからロシアへの労働移民を扱った第2章は第II部、人身売買を取り上げた第3章は第IV部に入れるのがより妥当ではなかったか。

このような若干の問題にもかかわらず、本書は中央アジアの移民の現状について知ることのできる貴重な文献であり、このテーマに関心のある読者に広く読まれることを期待したい。

(注1) 特に規模が大きいのがカザフスタンのドイツ系住民のドイツへの移住である。本書のもとになった研究プロジェクトのサイトには、この問題を扱った論文（ロシア語）が公開されている。http://www3.u-toyama.ac.jp/cfes/horie/CAMMIC-J/Publications_files/CAMMIC-WP5.pdf

(アジア経済研究所地域研究センター)